

極意

沢庵たくあん禪師といえ、沢庵漬けの創始者として、また、柳生たじまのかみむねのり但馬守宗矩の心の師として有名である。徳川三代将軍家光の帰依を受け、品川に東海寺を与えられ、江戸城に出仕した。

あるとき、朝鮮から珍しい大きな虎が将軍家に献上された。虎といえ、加藤清正の虎退治、話に聞くその実物が見られるとあって、城中はたいへんなさわぎだった。パンダが来た当時の人気を思えば大体想像がつくというもの。将軍家光も大いによろこび、座所の近く、庭にオリをしつらえ、伺候する人あれば、まず虎を見せ、虎についての先取りの知識を披れきしては悦に入っていた。虎見物が主目的であったかどうかは知らぬが、沢庵がお目通りねがうと、

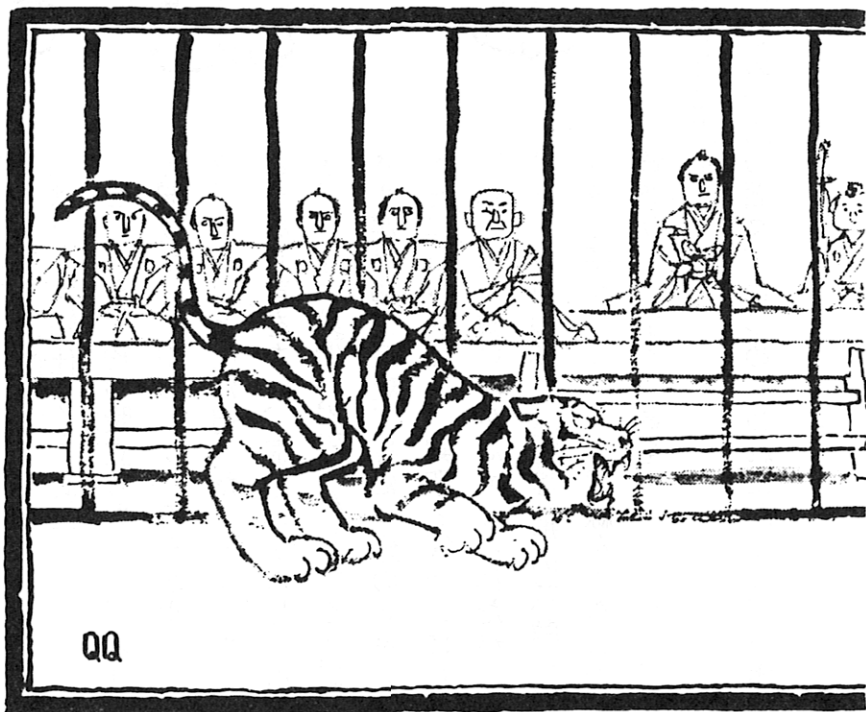
「苦しくない、近う、近う」

と、例によって例のごとく虎談義に及んだが、話の勢いあまって、

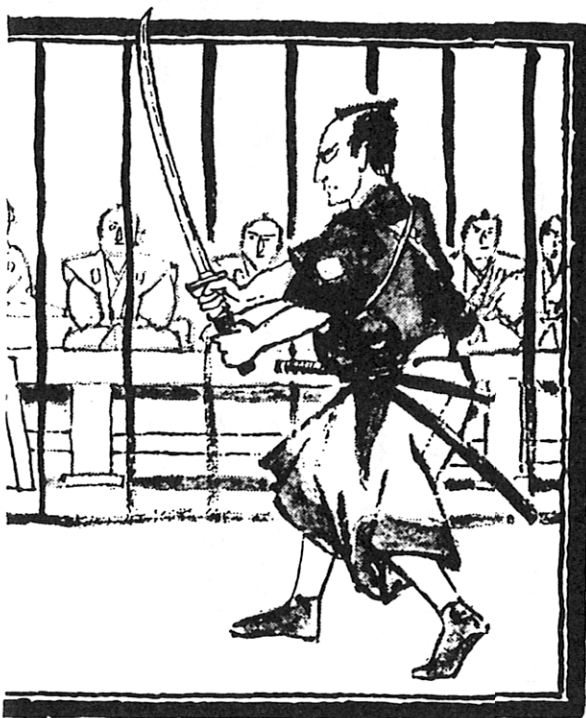
「但馬守を虎のオリに入れてみようか」

ということになり、宗矩が呼び出された。

柳生但馬守宗矩といえ、将軍家武芸指南番で、剣をとっては天下無双の達人。猛虎をおそれてオリには



QQ





いるのをしりごみしたとあつては醜名を万代にさらすこと必定。

「はッ、承知つかまつりました」

と、答え、袴の股立ちももたちをとり、オリの戸を開けさせて中に入り、刀をかまえてジリッ、ジリッと虎に迫った。虎は、ウォーッとうなり声をあげ、眼をいからし、爪をむき、いまにも飛びかからんものすごい形相。さすがは柳生宗矩、身に一分のスキもなく虎をにらみすえた。剣聖と猛虎のにらみ合いはしばし続いたかに感じられたが、それはホンの束の間で、虎は宗矩の威厳に屈し、攻撃の姿勢をくずして視線をそらした。勝負あり！ 宗矩、気を抜くことなく、静かに

に後退し、機を失せず、すばやくオリのそとに出た。

手に汗をにぎり、固唾かたすを呑んだ將軍はじめ一同の面々、はじめてわれにかえり、万雷の拍手を送った。

満悦の三代將軍家光、こんどは沢庵に向い、

「どうじゃ、和尚もやってみないか？」

「お望みとあれば！」

と、沢庵は気軽に答え、なんの身仕度も身がまえもなくオリにはいり、ノコノコ虎の前に進み出、犬や猫をかわいがると同じ仕草で虎の大きな頭をなではじめた。不思議なことに、虎は敵意を示すどころか、主人に愛撫される子猫のように目をほそめ、尻尾をふり、沢庵の体に頭をこすりつけるのであった。

見ていた人々は、あつけにとられ、宗矩の場合とは全くちがった光景に感歎措くことを知らなかったというが、沢庵と宗矩の間にはこれだけの距離があった。その距離を示すこんな話もある。

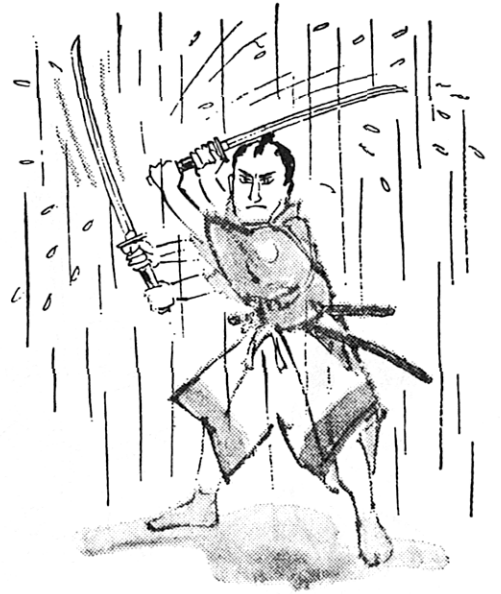
或る日、宗矩が沢庵をその室に訪ね、談たまたま極意ということに及んだとき、沢庵は、「極意は口で論ずべきものでなく、時処位に即して発揮されねば意味がない。ごらんのとおりいま雨が降ってるが、雨の中にあつて体の濡れぬ極意はあるか？」

と問うた。

「ございます」

「じゃ、見せてくれ」

「承知いたしました」



と、宗矩は、雨降る庭に出て、縦横無尽に雨を斬りまくって座に戻った。なるほど、雨に降られたにしては濡れてない。が、全然濡れてないわけではなく、多少は雨の痕跡が袖のあたりに残っている。

「貴公の極意はその程度か？」

「はい。では禅の極意では全く濡れないというのですか？」

「いかにも」

「ぜひ拝見させていただきたいものでござる」

「よし」

沢庵はつと立上って庭に降りてしばらく雨の中にたたずんだ。そして全身濡れねずみになって座に戻り、にこにこしながら言った。

「どうじゃ、わしの極意は？」

宗矩のいぶかる顔を見て、沢庵はきつい言葉で言った。

「貴公のは濡れているから極意にならん。わしのは濡れてない！」

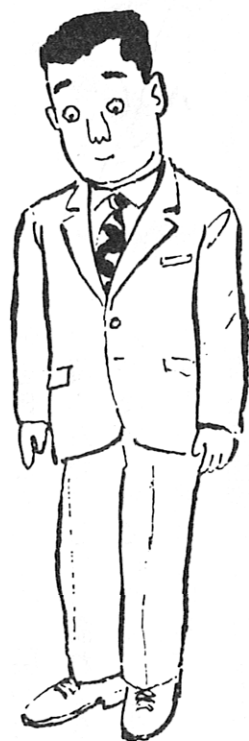
柳生宗矩は、濡れねずみになって極意の何たるかを教えようとする沢庵の老婆心をようや

く会得することができた。

宗矩が、無我夢中で雨を斬りまくったのは、虎をにらみつけたのと同様、主客対立、まさに対決の姿勢である。だから相手を気にし、負けまい、犯されまいと常に相手に動かされる。沢庵の場合はそうではない。虎のときは、かれをわれに摂取し、雨のときはわれを対境に没入する。ともに主客融合。一真実の世界である。

沢庵が宗矩に与えた『不動智神妙録』ふどうちしんみょうろくには、いながらに勝ち、無刀にして相手を制する不動智、剣禅の極意が説かれてある。





千手観音はくわしくは千手千眼観世音菩薩せんぢゆかんのんといって、手が千本あり、その掌にはひとつひとつ眼がついている。眼のついた千本の手をもって一切の衆生しゆじやうを救済きうさいなさる観音さまである。が、普通一般の木像では手が四十本しかない。それは一本の手で三界さんがい二十五有にじゅうごの世界を受持うけもちつから四十本で千本のはたらきをする計算になる。

奈良の興福寺には実際に手が千本あるりっぱな観音さまがあつて、徳川時代、その観音さ

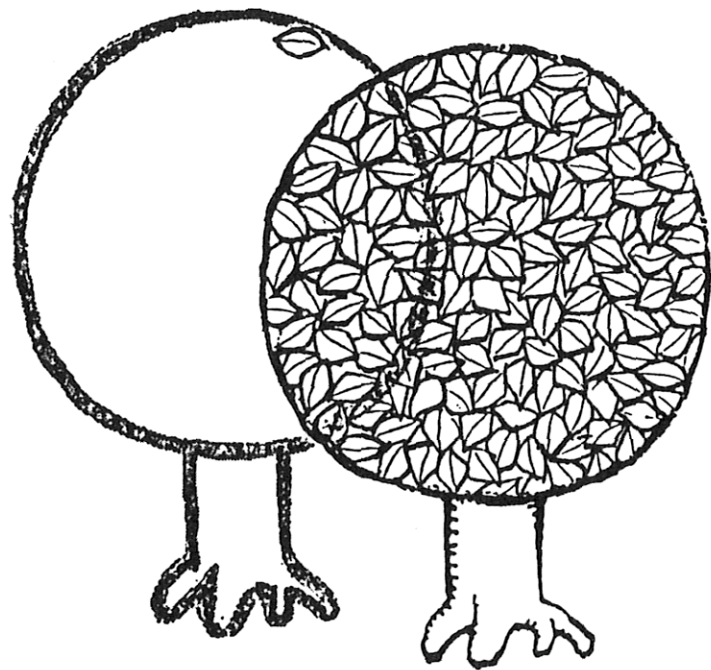
無念無想とは

クルマの運転をする人ならどなたにも思いあたることだろうが、練習しはじめのころは、シフト・レバーの操作に気をくばるとハンドルがおろそかになる。ハンドルに心を奪われると足の動きがギクシャクして思うようにならない。クラッチ操作をスムーズにしようとする方向指示を忘れてしまう。両手両足それぞれの操作にまんべんなく心をゆきわたらせることはなかなかむずかしい。それが練習の成果によって何等意を用いずして自由自在に動くようになる。考えてみれば不思議なことである。そこでここに千手観音さまにおでましをねがうとしよう。

まを江戸に持って行ってご開帳をした
ら、たいへんなおまいりがあったそう
だ。参詣人の中に皮肉な人がおつて、
「なるほどこれはたくさん手がある。
千本あるにちがいない。それにしても
足が二本じゃ足らんじゃないか」

と言ったら、説明役の坊さんが、
「そうそう、そのおあしが足らんから
こうして江戸までもらいに来たんじゃ」
と言ったという笑い話がある。

それはさておいて、沢庵禅師が柳生
但馬守に与えた『不動智神妙録』に、
手が千本あっても一つの手の動きに心
がとらわれてしまえば、残り九九九本
の手はどれも役に立たなくなってしまう。一カ所に心をとどめないからこそ千本の手がみな
役に立つのだ。観音とて、一つの体にどうして千本もの手を持つているのかといえは、不動
智を開くことができれば、たとえ千本の手があつたにしても、自由に使いこなせるものだ



いうことを人々に示すための姿である。

たとえば一本の木を見ているとしよう。その中の赤い葉一枚に心をとめれば、残りの葉は
目に入らないものだ。葉一枚一枚に目をかけずに、木の全体を何ということもなく見るなら、
たくさん葉が残らず目に映る。一枚の葉に心をとらえられれば残りの葉は見えない。一枚
の葉に心をとらえられることがなければ百千の葉はみな見えるものだ。このことを悟った人
はすなわち千手千眼の観音である……と述べ、さらに、

「向うへも左へも右へも、四方八方へ心は動き度きように動きながら卒度そつとも止まらぬを不動
智と申し候」
と示している。

禅というと無念無想を連想し、それは木石のように無神経になることだと誤解している向
きも少なくないようだが、無心とか無念無想とかは実はそうではなく、四方八方に気をくば
り、細心の注意を払いながら、しかもどこにも心をとどめないことである。天地いっぱいの
充実感をもって、しかも何物にもとらわれず、こだわらず、時処位に応じ自由自在にふるま
う。これが無心であり、無念無想であり、不動智であり、道元どうげん禅師のいう非思量ひしりょうである。そ
してそれは剣道の極意であり、芸道の奥義でもある。

宮本武蔵が、徳川義直の槍術指南番田辺八右衛門長常の家を訪れたとき、長常ははじめ手
合わせをとも考えたが、会ってみると、何もいままさら、という気になって、息子の碁の相手

禅のはなし ②

令和3年7月18日（日曜日）月次祭
こうとくにんげん塾 #287

出典：現代教養文庫・禅のはなし（佐藤俊明・著、社会思想社）

※本書は昭和52年6月『二つの月』のタイトルで刊行された。

※佐藤俊明（さとう しゅんみょう）

1916年山形県生まれ、駒澤大学文学部
仏教学科を卒業後、曹洞宗大本山総持寺
出版部長・布教師会 事務局長・副監院
を歴任。1985年から千葉県龍光寺住職。

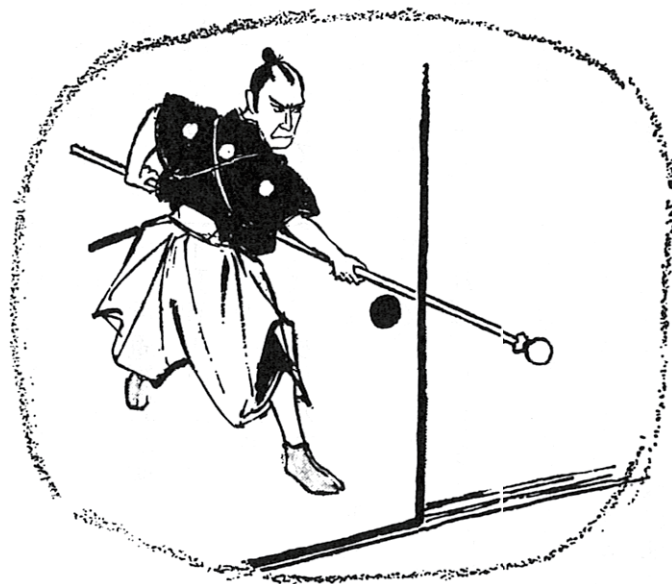
今後の予定

月次祭 8月 1日（日曜日）正 午
月次祭 8月15日（日曜日）正 午

★鴻徳神社・五穀さま通信（月2回配信・無料）★

ホームページより登録して下さい。

<https://kotoku-jinja.jp/mm>



194
になつてもらい、自分は自慢のふな料理でも仕度しようと思はずした。武蔵は長常の息子を相手に碁をはじめたが、そのうち、盤面をにらんで、ジツと手数を読んでいたが、突如ピシッと石を打ちおろし、
「そうはさせぬ！」
と、叱りつけるようなひとりの言葉をいった。息子がびつくりして武蔵を見ると、すでにそのときは平静な顔に戻っていたという。
では何故そんなことを言ったのかというと、実はそのとき隣の部屋から、長常が稽古槍で武蔵を突こうとスキをうかがっていたのだと



いう。
碁盤に注意を集中していても、これにとらわれず、四方八方に気を配っている武蔵はさすがに達人である。